



语言学论丛

跨文化交际日语学习者 交际策略研究

Communication
Strategies for Chinese
Learners of Japanese in
Cross Cultural Situation

方颖琳 著



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS



跨文化交际日语学习者 交际策略研究

Communication
Strategies for Chinese
Learners of Japanese in
Cross Cultural Situation

方颖琳 著



北京大学出版社
PEKING UNIVERSITY PRESS

图书在版编目(CIP)数据

跨文化交际日语学习者交际策略研究 / 方颖琳著. —北京: 北京大学出版社, 2019. 4

(语言学论丛)

ISBN 978-7-301-29889-3

I. ①跨… II. ①方… III. ①日语—研究 IV. ①H36

中国版本图书馆CIP数据核字(2019)第208691号

- 书 名** 跨文化交际日语学习者交际策略研究
KUAWENHUA JIAOJI RIYU XUEXIZHE JIAOJI CELUE YANJIU
- 著作责任者** 方颖琳 著
- 责任编辑** 兰 婷
- 标准书号** ISBN 978-7-301-29889-3
- 出版发行** 北京大学出版社
- 地 址** 北京市海淀区成府路205号 100871
- 网 址** <http://www.pup.cn> 新浪微博: @北京大学出版社
- 电子信箱** lanting371@163.com
- 电 话** 邮购部 010-62752015 发行部 010-62750672 编辑部 010-62754382
- 印 刷 者** 北京虎彩文化传播有限公司
- 经 销 者** 新华书店
- 650毫米 × 980毫米 16开本 16印张 320千字
2019年4月第1版 2019年4月第1次印刷
- 定 价** 58.00元

未经许可, 不得以任何方式复制或抄袭本书之部分或全部内容。

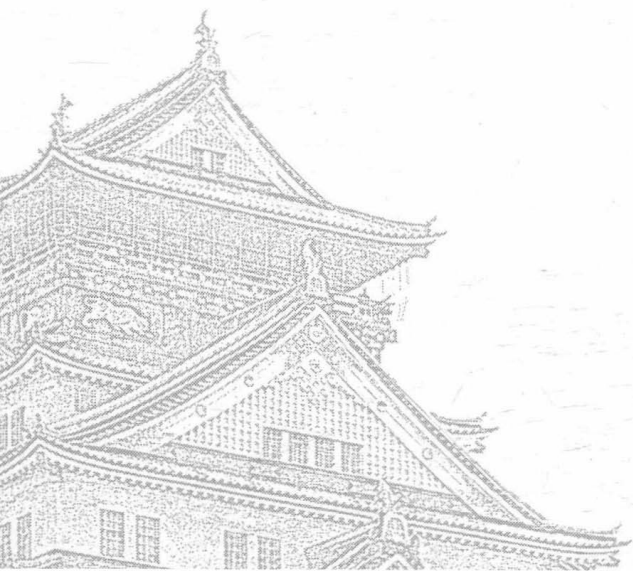
版权所有, 侵权必究

举报电话: 010-62752024 电子信箱: fd@pup.pku.edu.cn

图书如有印装质量问题, 请与出版部联系, 电话: 010-62756370



语言学论丛



前 言

近年来,随着国际化和教育体制改革的不断深入,外语教育的重心也由以往注重语法等基础知识的指导向培养具有跨文化交际能力的综合性人才转变。“跨文化交际能力的培养”成为贯穿本科学习阶段的指导性教学理念之一,被写入日语专业教学质量国家标准,标志着今后日语教学改革的主导方向。参照最新英语专业本科教学质量的国家标准,“跨文化交际能力”主要包括对多元文化的包容能力,对本国文化与外国文化间差异的敏锐感知能力,跨文化交际中的沟通及其策略运用能力。本书针对如何培养日语专业学生的交际策略能力展开系列研究,探讨推动并提升专业人才的跨文化交际能力的实际问题。

“交际策略(Communication Strategies)”,如语码转换(code-switching)、替换(paraphrase)、手势(gesture)等,是语言学习者在遇到由于语言资源有限而无法表达某些信息的情况时,为了克服交流障碍而采取的技能。交际策略是跨文化交际能力重要组成因素之一,其成功运用可以有效保证交际渠道的畅通。交际策略研究从20世纪70年代以来一直备受学界关注。早期的研究主要集中在针对交际策略的界定、分类、可教性、影响策略使用的因素等问题上。90年代之后的交际策略研究进入稳定期,策略分类的细化、策略教学的利与弊、对影响策略使用因素的进一步探讨成为这个时期研究的重点。与此同时,中国、日本等国家也开始关注欧美等国的交际策略的研究动态,许多学者开始引进介绍欧美国家的交际策略理论,对各自国家的英语学习者交际策略能力的理论、实证研究也由此展开。然而,以英语学习者为对象的交际策略研究已经取得了丰硕的结果,针对日语学习者的相关研究尚处于起步

阶段。

本书从应用语言学和社会语言学的角度较为全面系统地讨论了不同学习阶段的日语学习者所使用的交际策略的种类、特点、不同策略对于完成交际任务的影响，及学习者对交际策略的选择与使用与日语母语者间的互动行为之间的关联性等问题。并通过教学实践对日语学习者的交际策略能力的培养效果进行了细致入微的考察。

本书试图研究解决以下几个问题：

1. 中国国内的日语学习者在与日语母语话者进行跨文化交际时，在意思沟通过程中会遇到什么样的问题？
2. 日语学习者如何使用交际策略来解决“意思沟通”问题？其效果如何？
3. 日语母语话者在学习者使用交际策略时有什么样的互动行为？
4. 以上三者与日语学习者的习得程度有什么关联？
5. 适合我国日语学习者的交际策略教学法是什么？

全书共分八个篇章。第一章为导论，重点讨论跨文化接触场面中第二语言学习者的交际的特点和问题。并阐述了以中国日语学习者为对象的交际策略研究的意义所在。

本书第二章为理论背景和文献综述，论述了第二语言学习者的中间语言知识（inter-language knowledge）的发展过程和和二语习得研究领域交际策略研究的必要性。介绍了在第二语言学习者交际能力中交际策略能力的作用。并系统地概括了交际策略的定义、分类方法等已有的理论研究。在总结了以往的理论研究和实证研究的成果及仍待进一步解决的课题的基础上确立了本书的立场和研究课题。

本书第三章阐述了具体研究方法，数据，调查参与者的属性，分析对象和单位等。

本书的第四章到第六章是具体的实证研究的部分。遵循“意思沟通问题的出现→解决过程（单纯调整/复合调整）→解决效果”这一思路，对初次进行的跨文化交际场面中由日语学习者和日语母语话者参与的一对一的自由对话中出现的交际策略进行了多方位的分析。其中，第四章主要讨论了跨文化交际中出现的“意思沟通”问题的特点及与学习者的习得程度的关联性问题。第五章主要讨论了运用交际策略解决“意思沟

通”问题的调整结构，从“单纯调整”和“复合调整”两方面入手，分析获得成功的调整结构中交际策略的使用特点及与学习者的习得程度的关联性。第六章着眼于“意思沟通”失败的调整结构中交际策略的使用特点，并结合第五章的结论探讨如何有效地使用交际策略。

本书的第七章是教学实践的部分。在总结国内日语教学现状及之前的交际策略教学经验的基础上，结合第六章的结论进行了交际策略的教学实践。并对教学实践中交际策略的指导效果进行量性和质性的分析，最后探讨了适合我国日语学习者的交际策略教学方法。

本书的第八章结语部分通过对全篇进行总结和综合性地分析，最终得出本书的结论对国内日语教学研究的启示。并提出尚待解决的课题和今后的研究方向。

本书着眼于国内日语学习者交际策略使用的现状，从理论研究的角度阐述交际策略的习得与指导对交际能力的培养和外语教学的作用与意义。对初级、高级两个不同学习阶段的学习者所使用的交际策略的种类、特点、不同策略对于完成交际任务的影响、交际策略的选择与使用与日语母语者间的互动行为的关联性，以及培养交际策略能力的实现路径进行了卓有成效的整体分析和微观分析。本书紧扣日语专业本科教学质量最新国家标准中对专业人才“跨文化交际能力”培养的要求，对于促进跨文化视域下的国内日语教学方法的改革有着重要的意义。

本书是笔者根据自己的博士学位论文进行修改整理而成。本书获得了2016年度湖南省哲学社会科学基金一般项目《基于交际策略教学的日语专业跨文化交际能力培养研究》的经费支持，并得到了中南大学外国语学院省级重点学科外国语言文学的经费资助，特此鸣谢。

目次

第1章 序論	1
1.1 研究背景	1
1.2 本書の目的	5
1.3 本書の構成	5
第2章 理論的背景と先行研究	8
2.1 CSに関する理論的背景	8
2.2 L2学習者を対象としたCSの先行研究	25
2.3 先行研究の問題点と本書の課題	42
第3章 研究方法	47
3.1 分析方法	47
3.2 データ	47
3.3 CS教授実践の概要	53
3.4 分析対象および単位	54
第4章 研究 I	57
4.1 研究背景および問題の所在	57
4.2 研究目的と課題	60
4.3 研究方法	60
4.4 結果と考察	66
4.5 本章のまとめ	73

第5章 研究Ⅱ、研究Ⅲ	74
5.1 研究Ⅱ 意味伝達の問題を解決するための調整構造および学習者による単純調整	74
5.2 研究Ⅲ 複合調整におけるCS使用に見られる学習者と母語話者との相互作用	96
5.3 本章のまとめ	119
第6章 研究Ⅳ	121
6.1 研究背景	121
6.2 研究目的および課題	123
6.3 研究方法	123
6.4 結果および考察	126
6.5 効率的な問題解決のあり方について	142
6.6 本章のまとめ	143
第7章 研究Ⅴ	145
7.1 実践の背景および目的	145
7.2 先行研究	147
7.3 実践の概要	152
7.4 実践の評価方法	158
7.5 結果と考察	158
7.6 本章のまとめ	168
第8章 総括	170
8.1 結果のまとめと総合的考察	170
8.2 本研究の意義	176
8.3 今後の課題	178
付記	180
参考文献	181
稿末資料	196
謝辞	245

第1章 序論

1.1 研究背景

1.1.1 第2言語学習者とコミュニケーション方略

言語発達途中の第二言語（以下L2）学習者は、語彙、文法、音韻・音声的言語知識が目標言語（target language）話者に比べて不足しているため、目標言語で実際のコミュニケーションを行う際に、次のような場面に遭遇した際しばしば、対応に戸惑う。

- (1) 適切な単語が思いつかばなかったら、どうするか。
 - (2) 自分の考えをまとめるために躊躇っているとき、コミュニケーションを断ち切らないようにするにはどうするか。
 - (3) 相手の話が早すぎて聞き取れなかったとき、それを（相手に）どう知らせるか。
 - (4) 相手の使った単語や表現が理解できなかったとき、それを（相手に）どう知らせるか。
 - (5) 自分の伝えたいことが相手に誤解された場合、どうするか。
- (Savignon 1983:40-41, 筆者訳)

以上のような場面に遭遇した学習者は、言語産出面と言語理解面に生じた困難を乗り越えるために、いろいろな工夫をする。例えば、学習者が話し手として、聞き手に自分の好きな果物を紹介しようとする場面で、「みかん」という言葉を生成する際に問題が生じたときに、

例 (1) 〔両手を合わせてみかんの形を作りながら〕 黄色い果物

と言い換えるような発話が見られる。これは「みかん」という語を知らないため、または想起できないため、その語を使わずに同様のL2言語である「黄色い」（属性）、「果物」（上位概念）で表現すると同時に、ジェスチャーで「みかん」の形（属性）を示す、といった組み合わせた内容で伝達ができるように試みたものである。

このように、L2学習者は意味の伝達を達成するために、言語、非言語のリソースを活かしてL2言語知識の不足を積極的に補う姿勢が窺える。このようなコミュニケーションに生じた問題を解決するための言語及び非言語的な行動を「コミュニケーション方略」（Communication Strategies, 以下「CS」）と称す。もちろん、コミュニケーションに障害が生じた際に、CSを利用することは母語でも決して珍しいことではないが、L2使用の場合では、通常その使用頻度は母語の場合とは比較にならないほど高くなる。

CSに関する研究は、1970年代から80年代に、多くの人々が労働や旅行を目的に、国家間を移動するようになった社会的背景の下に登場してきた。初期のCS研究は英語学習者のCSを中心に進められてきたが、90年代以降の日本とアジアの諸国との交流の増進を反映し、次第に日本語学習者へと研究の対象が広がってきた。

尾崎（1998）は「日本語による異文化コミュニケーションの過程で、どのような問題が、いかなる原因で起き、その問題がどのように処理されているかを明らかにする研究は日本語教育の内容と方法を考える上でとても重要である」（p. 18）と指摘し、日本語教育におけるCS研究の重要性を強調している。

1.1.2 JFL中国人日本語学習者を対象にしたCS研究の意義

近年、中国において、日本のポップ・カルチャーへの関心を背景にした学習動機や「将来の就職」等経済的・実利的理由に支えられて大学を中心に学習者が急速に増加し、2012年には日本語学習者数が100万人を超え、世界の日本語学習者数の第1位となっている（国際交

流基金2013)。その膨大な学習者数のうち大半を占めるのが中国国内の大学で日本語を専攻とするか、選択科目として勉強している学習者で、その数はこれからも増える見込みである。これらの学習者のほとんどは大学に入ってから日本語の学習を始め、主に日本語非母語話者の教師の指導のもと教室内で日本語を習う。むろん、インターネットや音声メディアなどの学習ツールを利用することはあるが、日本語母語話者との対面コミュニケーションをする機会は乏しい。ひとたび接触場面となると、それまでに蓄積された知識を用いて日本語母語話者とコミュニケーションに取り組む。しかし、語彙、文法などの面における学習者の言語的能力の不足によってさまざまな問題が起こり、それが母語話者との意味伝達を妨げる要因となっている。

このような母語話者との接触機会、経験の少ない学習者のコミュニケーション能力を育むことが中国国内の教育現場での大きな課題である。この現状を踏まえ、中国で施行されている最新の高等教育シラバスでは、学習内容に日本社会、日本文化、日本経済などの内容が取り入れられている。そして、日本事情を理解した上で日本人の行動様式を理解し、日本人との交流に能動的に参加する態度を養い、日本語を用いて実際にコミュニケーションする能力を獲得させるという日本語教育の最終目標が掲げられている。また、コミュニケーション活動を通じて、言語能力だけではなく、コミュニケーションの場や状況に応じて適切に言語を使用する能力（言語運用能力）の育成を教育目標としている。これは、日本語によるコミュニケーションをより自然に行うために、文法的知識や語彙を増やし、それを正確なものにするだけでは不十分であるという認識に基づいているからだと思われる。

その目標を達成するために、中国人学習者のレディネスとニーズを重視し、コミュニケーション場面を想定した会話教材も開発されている（曹2011）。しかし、これらの教材には、場面や機能を重視してコミュニケーションを円滑にするための方略は含まれているものの、コミュニケーションのギャップ、問題が生じた場面からいかにして脱出するか戦略とその指導法を取り入れたものは見当たらない。

日本語科の授業で学習者に活発なコミュニケーションを促しても、学習者の言語能力が限られているため、いかに積極的に会話に参加したらいいか戸惑ったり不安を覚えたりする学習者は少なくない。学習者に様々なCSの形態や使用方法を教え、無用な沈黙を強いることなく、会話を持続させることの重要性を理解させる必要があるといえる。その場合、中国人日本語学習者の会話教育にCS指導を導入するためには、学習者がどのようにCSを使用しているか、またその使用にはどのような問題が見られるか、といった実態を調べる必要がある。

最近の中国人日本語学習者の日本語の談話構造や展開などに注目した研究を概観してみると、ポライトネス理論、Leechの会話原則の視点から、間接発話行為（趙2001）、言いさし（馬・王2002）、フィルター（範2002）、依頼—断り行動（陳・劉2010）などを分析対象とした研究が現れてきた。また、言語行動のほか、非言語行動（張2006）、メタ言語の使用（李2008）についても関心が寄せられている。しかし、中国での学習者のCS使用の特徴を解明する研究は、まだスタートしたばかりである。かろうじて、討論場面に見られる学習者のCS使用の問題点（田・林2009）、「聞き返し」（曾2010；曾・呉2010）、共同解決型方略（許2012）に注目した研究が見られるが、データ数が不十分であり分析対象も限られているため、中国人学習者が使用するCSの特徴はまだ十分に明らかにされていない。これらの研究は主に中国人学習者同士の会話をデータとし、学習者と日本語母語話者が参加する接触場面の会話データに基づく研究は管見の限り極めて少ない。母語話者を会話相手とする接触場面で使用するCSは学習者同士の会話で使用するCSとは異なる特徴が見られると推察される。そのため、学習者と母語話者が参加する接触場面におけるCSの特徴を探る必要があると思われる。接触場面におけるCSの実態及びその問題点を解明すれば、日本語学習者にとって学習の素材が豊かになり、実際のコミュニケーションではどのような問題が現れるか、またその問題はどのように解決できるのかを予め予測できるようになる。さらに、そこで得られた知見は中国人日本語学習者に応じたCS指導や大学の専門日本語会話教育のシラバス、教材を作成するために大

いに役立つであろう。

したがって、JFL環境での中国人日本語学習者が日本語母語話者とコミュニケーションする時に遭遇する問題の特徴とその問題を解決するために使用するCSの様相を踏まえた上で、中国人に適したCS指導のあり方を検討する必要があると思われる。

1.2 本書の目的

本書では、接触場面における中国人日本語学習者が意味伝達の問題を解決するために使用したCSに注目し、日本語習熟度が異なる学習者が使用するCSの実態を解明することで、言語発達に伴ってCSの使用にどのような変化が見られるか、またその使用にはどのような問題が見られるかを指摘し、CS使用の特徴および問題点を手がかりに効果的な問題解決法を探ろうというものである。

さらに、中国人日本語学習者のCS使用の特徴を踏まえた上で、中国人日本語学習者を対象にCSの明示的指導の実践を行い、その実践の結果および評価に基づき、中国での大学の専門日本語会話教育への示唆を得ることを目的とする。

1.3 本書の構成

本書の全体の構成は、7頁の図1.1の通りである。

第2章では、まず、CS研究の理論背景、つまり、コミュニケーション能力^①における方略能力の位置付け、CS研究の2つの観点^②を紹介する。次に、これらのCS研究の理論を踏まえ、本研究の理論的立場を明確にし、本研究で扱うCSの定義を述べる。続いて、CSとL2学習者の中

① Canale (1983) はL2教育の観点からコミュニケーション能力 (Communicative Competence) を捉え、コミュニケーション能力は文法的能力、社会言語学的能力、談話能力、方略的能力の4つの構成要素からなると定義している。

② CS研究は、発話の産出結果に焦点を当てたプロダクト研究と、発話の心理過程を重視したプロセス研究の2つに分かれる。

間言語の発達の間に見られる相関について論じ、日本語学習者を対象とした各種のCSの実証研究についてまとめる。それらによって得られた結果を概観し、残された課題に基づいて本研究の分析の観点を定め、研究課題を設定する。

第3章では、分析方法、データ、会話協力者の属性、分析の対象と単位について説明する。

第4章から第6章では、学習者のCS使用についての実証研究を行う。具体的には、まず、第4章では、接触場面でのコミュニケーションにおける意味伝達の問題の発生に焦点をあて、学習者によって生じた問題の種類と習熟度との関係について検討する(研究I)。次に、第5章では、CS研究の2つのアプローチに基づき、問題解決の全体図を把握するために、問題を解決するための調整構造の特徴を明らかにした上で、学習者が行った「単純調整」(研究II)と、会話者間の意味交渉に伴う「複合調整」(研究III)のそれぞれに注目して分析を行う。さらに、第6章では、問題解決に失敗したCS使用に焦点を当てて考察し、効果的なCS使用とは何かを検討する(研究IV)。

第7章の研究Vでは、中国における日本語教育の状況と以上の研究から分かったことを踏まえ、これまでのCS指導の実践研究の良い点と改善すべき点を考慮した上で実践を試み、JFL環境における中国人学習者に適したCS指導の方法を検討する。

第8章では、全体的なまとめと総括的考察を行い、中国における日本語教育への示唆及び今後の課題を述べる。



図1 本書の構成

第2章 理論的背景と先行研究

本章では、まず本研究の対象である L2 学習者が使用する CS の理論的背景を示し、本研究での CS についての定義を述べ、研究の理論的立場を明確にする。次に、日本語学習者の CS 使用に注目した先行研究を概観し、本研究の課題を明らかにする。

2.1 CSに関する理論的背景

本節では、CS が研究対象とされるようになり、CS 研究に至るまでの言語研究の状況について概観する。具体的には、まず、コミュニケーション能力における方略的能力の位置づけを述べ、方略的能力の役割を解明した CS 研究の理論的背景、CS 研究に関連する研究の観点および主な概念を応用言語学と心理言語学の分野から捉て議論する。続いて、先行研究を踏まえた上で、本研究における理論的立場を提示したい。

2.1.1 コミュニケーション能力における方略的能力の位置付け

外国語教育の重要な目的の1つとして学習者のコミュニケーション能力 (communicative competence) の向上が挙げられる。コミュニケーション能力は文法能力のみで測れるのものではなく、いくつかの異なった能力が互いに補い合って構成されている。その下位構成要素の1つが「方略的能力 (strategic competence)」である。